「現代現象学の批判的検討」前書き

松井　隆明
（東京大学／ダートマス大学）

以下に収録されている諸論文は、2018 年 3 月 17 日（土）に早稲田大学戸山キャンパスで開催されたフッサール研究会第 16 回研究会シンポジウム「現代現象学の批判的検討」をもとにしたものである。このシンポジウムは、2017 年に出版された『ワードマップ現代現象学』(植村・八重徹・吉川編、新曜社)をめぐって、哲学としての現象学の現代的意義を問い直すことを趣旨として開催された。シンポジウムでは、日本の現代哲学を牽引する荒畑靖宏、鈴木生郎、戸田山和久の三氏が本書に関する問題提起を行い、次いで本書の著者である植村玄輝、富山豊、森功次、八重樫徹、吉川孝の五氏が応答し、最後にフロアを交えて議論を行った。シンポジウムは 4 時間にわたる長丁場であったが、終始非常に密度の高い議論が展開された。また、当日の研究会参加者は 69 名に達するなど、フッサール研究会としても大変な盛会となった。シンポジウムのオーガナイザー兼司会として、提題者の三氏と著者の五氏にはこの場を借りて改めて感謝申し上げたい。

今回のシンポジウムでは、現象学の弁別的特徴は何なのか(何であるべきなのか)という論点に関して、5 人の著者の見解は一致していないということが際立たせられた。シンポジウムの成果を論文化する際、5 人の著者の最大公約数的な見解をまとめるよりも、各著者が自分自身の立場から応答論文を執筆した方が今後の継続的な議論につながるのではないかという考えから、各著者に応答論文を執筆していただくことにした。ここに収録された諸論文からさらなる議論が生まれれば、シンポジウムオーガナイザーとして幸いである。